

# イネ育種の現場から

## 農業試験場の役割

宮城県古川農業試験場・永野邦明場長に聞く

文・写真＝編集部

種子法廃止の理由の一つとして、農水省は「都道府県の枠を超えた広域的・戦略的な品種開発と種子生産のニーズに、現行の奨励品種制度が応えられていない。そこに民間の力を借りたい」と答えていた。長年にわたって育種の仕事を続けてきた永野さんの話を聞くと、いまイネの育種に「民間の力」が必要とは思えない。

### いつ来るかわからない冷害と向き合う

種子法は、イネ・大麦・裸麦・小麦・大豆を対象にした法律で、都道府県は、この法律に基づいて「奨励品種」を定め、そのための品種改良と、農家に供給される種モミを採種するための「原種」「原種」の生産を行ってきた。農水省の水稲育種指定試験地でもあった宮城県古川農業試験場は、ひとめぼれのような全国的に普及した品種をはじめ、たくさんの奨励品種を世に送り出してきた。



宮城県古川農業試験場長・永野邦明さん



新品種開発のため交配したイネ。ここから10年近くたって新品種が誕生する。古川農試では育種のために1年に10万株が栽培され、その中から品種に育つのは3~4年に一つ

## ひとめぼれの誕生

——永野さんが育種の仕事にかかわってきた経緯から教えてください。

宮城県内で農業改良普及員の仕事を7年して、古川農業試験場に来たのが昭和63年（1988年）。そこからはずっと育種に関わってきました。

昭和63年というのは冷害の年です。また、この年は、後にひとめぼれという品種名が見ついた東北143号の奨励品種決定調査を始めた年でもありました。「63年冷害」でさっそく耐冷性が評価され、3年間の調査を経て平成3年（91年）にひとめぼれとしてデビューする。私が育種の仕事に関わって最初に登録された品種です。

もっと劇的だったのは2年後の「平成5年の大冷

害」です。障害型冷害で実らないイネが多かった中で、ササニシキとひとめぼれの差は歴然としていました。それで、東北地方で広く栽培されていたササニシキが一気にひとめぼれに入れ替わりました。

——当時は、耐冷性が品種改良の大きな課題だった？

育種の方向性が大きく変わったのは昭和55年（80年）です。この年も冷害でした。じつはササニシキが普及した昭和30年代半ば以降、55年冷害まで、東北ではずっと冷害がなかったんですね。それで油断していた。当時の主力品種であるアキヒカリ、トヨニシキ、キヨニシキ、ササニシキがみんな冷害に弱いということが、ここで暴露されるんです。その頃の冷害の検定方法だと、アキヒカリなどは冷害に弱いとは見られていなかった。だから、耐冷性を調べるやり方から根本的に変えなければいけないということ突きつけられた。

当時は、耐冷性を調べるのに川水を入れて見ていたんだけど、水温が変動して冷たい水ではないときがあったんですね。そこで古川農試では独自のやり方を編み出した。ここは水温が15℃、16℃の地下水が豊富に出るので、それを利用して常に低温の深水状態にイネをさらす「恒温深水法」という方法を考案しました。

——ひとめぼれの片親はコシヒカリでしたか。

55年冷害では、なぜかコシヒカリが冷害に強いということがわかったんですよ。当時は、東北の品種では